

世界遺産教育における教材化と教育実践のあり方

－「法隆寺地域の仏教建造物」と「木の文化」の視点から－

祐岡 武志 奈良県立法隆寺国際高等学校
中澤 静男 奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター

(平成24年5月7日受理)

To Make World Heritage into Teaching Materials and Put it into Practice : From the Viewpoint of “Wooden Culture” of “Buddhist Monuments in the Horyuji-Area”

Takeshi YUUOKA
(Horyuji Kokusai High School)

Shizuo NAKAZAWA
(The Center for Study of Education for Sustainable Development
and Cultural Heritage Education Nara University of Education)

(Received May 7, 2012)

Abstract

The “Buddhist Monuments in the Horyuji-Area” was the first World Heritage site to be registered in Japan, as it was recognized for its “Outstanding Universal Value” as the oldest wooden building in the world. However, it is not well known that these wooden buildings need to be repeatedly repaired to remain so long or that many people have been involved to sustain the temple. In addition it is not well known either that Japanese wooden buildings like Horyuji Temple expanded the registration criteria, which previously only focused on stone buildings.

This article suggests some ideas to make World Heritage sites into teaching materials from the viewpoint of “Wooden Culture,” which has passed on the tradition of wooden buildings in Japan. This analysis also suggests that World Heritage Education should become a universal and significant education practice, since it is strongly connected to Education for Sustainable Development.

キーワード：世界遺産教育，木の文化，ESD（持続発展教育），顕著な普遍的価値（OUV）

Key Words : World Heritage Education, Wooden Culture, Education for Sustainable Development, Outstanding Universal Value

1. はじめに

2011年6月、日本で15番目と16番目の世界遺産が誕生した。自然遺産としての「小笠原諸島」と文化遺産としての「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」である。日本国内で、同時に複数の世界遺産が登録されたのは、日本が世界遺産条約を批准した1992年の翌年、一気に「法隆寺地域の仏教建造物」「姫路城」「白神山地」「屋久島」の4件が日本で初めての世界

遺産に登録された特別な例を除くと、1996年に「厳島神社」と「原爆ドーム」の2件が同時に登録されて以来のことである。これは、昨今の世界遺産への登録認定の厳しさから鑑みると、日本にとっては久々の朗報といえよう。これにより、国内では、世界遺産に対する関心が高まることが予想される。

世界遺産への関心が高まることは喜ぶべきことではあるが、ブームの高まりに対して、世界遺産そのものへの理解が追いついていない現状がある。むしろ、世界遺産

への理解不足が、新たな危機をもたらすことが問題とさえなっている。例えば、「屋久島」では、多くの観光客が訪れることで、本来の豊かな自然環境が破壊されている。縄文杉を目指す登山者により、地表を覆っていた苔がはがれるだけでなく、土壌が踏み固められることで植物の生育に悪影響が出ているという。また、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」においては、整備された道路や軒を連ねる店舗が景観を損ねるという点で、本来の世界遺産の価値を脅かしかねない深刻な状況が惹起している。

このため、世界遺産を正しく理解し、より望ましい状態で後世に伝えていくための教育が必要となっている。この教育を世界遺産教育（World Heritage Education = WHE）と呼び、その広がりをも提唱しているのはユネスコである。ユネスコは、ユネスコスクールの一つの教育事例として世界遺産教育を紹介しており⁽¹⁾、その必要性は認知されつつあるが、実際の取り組みは少ないのが現状である。全国的にも唯一といえる地域ぐるみの取り組みとしては、中澤（2009）の奈良市の世界遺産学習を例示できるが、他の地域への普及が課題となっている。

このような状況で、2011年3月18日、社団法人日本ユネスコ協会連盟は、三菱UFJフィナンシャル・グループと国立大学法人奈良教育大学の協力のもと、「守ろう地球のたからもの『豊かな世界遺産編』」（以下、「豊かな世界遺産編」と記述）を作成した。これは、その名の通り、世界遺産について学ぶ教材キットであり、現在インターネットの申込みを通して、希望するユネスコスクールに配布中である⁽²⁾。

この「豊かな世界遺産編」については、既に山下・田淵（2010）により、その作成経緯や基本コンセプトが明らかにされ、山下が開発した「コルディリエラの棚田」の「授業の流れ」（教案）が提示されている。監修者である田淵によれば、監修の意図の一つは、世界遺産がESD（Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」、文部科学省の用語では「持続発展教育」）に迫る有益なツールになることである。もう一つの意図は、世界遺産を、①人権・平和、②環境の保全、③文化の多様性、④人間的つながり・連帯・協調の四つの切り口から捉えてESDにつなげる論拠を示すことという。その後、「豊かな世界遺産編」は校正が進み、山下・田淵の報告から1年を経て、ようやく完成にこぎつけた。このため、若干の構成上の変化が見られる。

以上の経緯を踏まえた上で、本稿では、次の三つのことについて論じる。一つには、完成した「豊かな世界遺産編」の内容に基づき、そのコンセプトやテーマについて説明をする。教材キットの根底にあるものを明確にすることが、本稿の理解のために不可欠と考えるからである。二つには、この教材キットの学習モデルの構成に触れながら、筆者が開発した「木の文化」のワークの内容

を具体的に紹介する。この実践は、「豊かな世界遺産編」の作成前から学会発表や実践報告、講演等、日本各地で紹介していたもので、授業での実践を重ねたものである。三つには、この実践についての学習者の感想や講演会等での反応、また実際に他校で実践された事例報告から、この学習モデルの学習効果について検証する。そして、ESDとの関連性を指摘するとともに、世界遺産教育の実践のあり方に言及することで、世界遺産教育の意義に迫ることが本稿の目的である。

2. 世界遺産教材「豊かな世界遺産編」について

2.1. 教材の特徴

先述の「豊かな世界遺産編」の「教材の手引き」では、教材の特徴を次のように述べている。

- 小学校の5年生・6年生、中学生、高校生を対象にしています。
- 世界遺産を切り口として、ESD（持続発展教育）を推進していくための教材です。
- 4つのテーマのもと、14の独立したワークで構成されています。
- 各ワークには写真や映像を用意し、子どもたちが楽しく学べるよう工夫してあります。
- 各ワークは「総合的な学習の時間」や、社会科・理科などの当該単位の中でご活用いただけます。
- 「豊かな自然編」⁽³⁾とあわせて学ぶことで、自然・社会の両面から持続可能な社会づくりについてより深く学ぶことができます。

このように、この教材のねらいや構成、目的、活用方法が明確に述べられている。中でも、ESDとの関連性を示している点が注目される。

2.2.4 4つのテーマと14のワーク

教材の特徴でも述べられた4つのテーマは、この教材の骨子を成しており、各テーマに沿って3つから4つのワークが提示されている。以下に、その構成に沿って紹介する。（☆は各ワークで扱う世界遺産。）

第1章：文化の多様性と異文化理解について学ぶ

① a 世界遺産って何？

日本にはどんな世界遺産があるの？

☆「日本の世界遺産（2011年7月現在、16件）」

b スライドショーをつくり、まちのたからものを未来に伝えよう

② 「木の文化」は自然と共生した暮らしの証拠！

法隆寺の木造建築に学べ

☆「法隆寺地域の仏教建造物（日本国）」

☆「アテネのアクロポリス（ギリシア共和国）」

☆「ジェンネ旧市街（マリ共和国）」

- ③ 姫路城の美しさのひみつと、城を遺してきた人々の働きについて学ぶ

☆「姫路城（日本国）」

☆「アルハンブラ宮殿（グラナダのアルハンブラ、ヘネラリーフェ、アルバイシン地区）（スペイン）」

- ④ 先住民の聖地ウルルはなぜ「エアーズロック」とよばれたのか？

☆「ウルルーカタ・ジュタ国立公園（オーストラリア連邦）」

☆「トンガリロ国立公園（ニュージーランド）」

第1章では、日本の世界遺産から世界遺産の概要について学習した後、7つの世界遺産を通して、文化の多様性や異文化理解の必要性について学ぶ構成である。

第2章：環境と生物多様性について学ぶ

- ① 気候変動の影響を北極圏と赤道直下の世界遺産から考える

☆「イルリサット・アイスフィヨルド（デンマーク王国 [グリーンランド]）」

☆「キリマンジャロ国立公園（タンザニア連合共和国）」

- ② ガラパゴス諸島の実例から自然遺産の観光地化について話し合う

☆「ガラパゴス諸島（エクアドル共和国）」

☆「屋久島（日本国）」

- ③ 知床の自然保護のためにできることは？
してはならないことは？

☆「知床（日本国）」

☆「イエローストーン国立公園（アメリカ合衆国）」

第2章では、気候変動や、観光客の増加などの理由で環境破壊が進んでいる6つの世界遺産の事例から、自然や動物、植物と人間との深い関わり合い（共生）、そして自然保護と観光のあり方などについて考える構成である。

第3章：平和と人権について学ぶ

- ① 大仏を通して心の中に「平和のとりで」を築き、持続可能な社会を考える

☆「古都奈良の文化財（日本国）」

☆「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群（アフガニスタン・イスラム共和国）」

- ② 戦争の記憶から平和のためにできることを考える

☆「原爆ドーム（日本国）」

☆「アウシュヴィッツ（ポーランド共和国）」

- ③ 自由と平等を求めて！

差別を許さない心を育てる

☆「ゴレ島（セネガル共和国）」

☆「ロベン島（南アフリカ共和国）」

第3章では、戦争と人権の侵害はすべてを無に帰してしまうとの観点から、優れた文化遺産や貴重な自然を守り伝えるためには、平和が保障されると同時に、人々の

人権が保障されなければならないことを、6つの世界遺産の事例を通して理解する構成である。

第4章：連帯、人のつながりの大切さを知る

- ① 合掌造りを守ってきた「結い」と集落の歴史から、文化・自然・観光の共生を考える

☆「白川郷・五箇山の合掌造り集落（日本国）」

☆「福建の土楼（中華人民共和国）」

- ② 文化と生活を守るため、互いに支え合う

人々の新しいつながりを！

☆「フィリピン・コルディリエーラの棚田群（フィリピン共和国）」

- ③ 修復の技術者を失ったアンコール遺跡の保存は国際協力の人材育成から

☆「アンコール（カンボジア王国）」

- ④ 危機遺産を救え！世界遺産破壊の原因は？

人類の遺産は人類が守る

☆「ドゥブロヴニク旧市街（クロアチア共和国）」

☆「ガランバ国立公園（コンゴ民主共和国）」

☆「ケルン大聖堂（ドイツ連邦共和国）」

第4章では、経済のグローバル化の結果、経済格差が拡大し、人間的な絆が切断されている実情から、持続可能な社会とは、連帯・協調が実現した人間的なつながりがある社会であることを7つの世界遺産を通して学ぶ。

このように「豊かな世界遺産編」では、4つの観点からESDに迫る内容構成となっている。そして、終わりに「世界遺産教育の意味とその可能性－ESDを視野に入れて－」として、監修者の田淵が世界遺産を教材に使うことにどのような意味があるのかを、次の6点から述べている。

① 世界遺産は人類共通のたからもの

② 危機遺産と世界遺産教育の必要性

③ 世界遺産教育を知り、感じ、伝える

④ 世界遺産は「幸運にも遣ったもの」

⑤ 保存や保護のための教育も必要

⑥ 国際理解、人権や平和、環境を考えるきっかけにも

そして、学習者がこのような視点を獲得できれば、世界遺産を持たない地域での「地域遺産教育」（第1章①bスライドショーづくり）にも有効であると述べている。全体を通してESDに迫る構成ながら、1つのワークを取ってもESDと関連していることが、この教材の特徴である。

3. 「木の文化」における教育実践

この章では、「豊かな世界遺産編」第1章②の「『木の文化』は自然と共生した暮らしの証拠！法隆寺の木造建築に学ぶ」（以下、「木の文化」）のワークを紹介する。地域の文化財として、これまでもたびたび学習したはずの法隆寺を「木の文化」というテーマで捉え直すと、新た

な教育素材となりえることが、この実践から明らかになる。

3.1. 「木の文化」の概要

1993年、「法隆寺地域の仏教建造物」が世界遺産に登録された。これは、日本の「木の文化」の価値が世界的に認められたことを意味する。ここでは、パルテノン神殿やローマ時代の建造物に代表されるヨーロッパの「石の文化」と、法隆寺に代表される「木の文化」を比べながら、木の文化が認められた意義を学習し、破損・焼失しやすい木造建築を現代に伝えた人々の思いと、自然と共生する暮らしの大切さについて学習する。

3.2. 「木の文化」のねらい


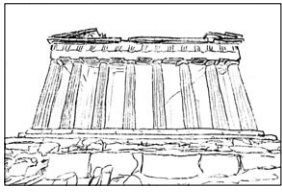
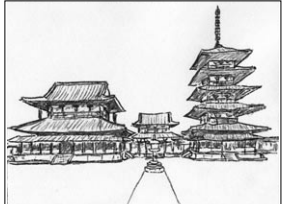
- ① 「木の文化」の価値がヨーロッパに認められたことは、文化の多様性への理解が世界的に広まった一例であると理解する。
- ② 壊れやすい木造建築物が、1300年以上の時を経て現代に伝えられた偉大さを知る。
- ③ 「木の文化」を守り、伝えようとした人々がいたことと、その取り組みを知る。
- ④ 身近に残る文化財の価値を知り、それを守り、伝えていくために何が必要か考える。

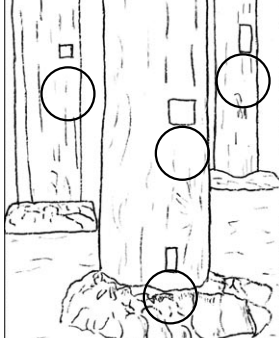

3.3. 「木の文化」の指導計画例

- 事前** **学習する** 世界遺産が誕生した経緯を知る
エジプトのスピア遺跡救済キャンペーンをきっかけとして、世界遺産条約が締結された経緯を学習する。
- 事前** **調べる** ユネスコについて知る
ユネスコの役割や、ユネスコと世界遺産の関わりについて調べる。
- 事前** **学習する** 世界遺産が認定されるまでの経緯を知る
各国から推薦された物件が、ユネスコを通じて世界遺産に登録されるまでの過程を学習する。
- 事後** **まとめる** 世界遺産の種類や登録基準を知る
文化遺産、自然遺産、複合遺産といった世界遺産の種類や、それぞれの登録基準について学習する。
- 留意点** ●事前指導では
世界遺産の基礎知識がなければ、世界遺産が誕生した経緯について学習する。
- 留意点** ●本時の指導では
世界の文化の多様性の理解につなげる。各地に現存する文化財や豊かな自然もふくめた「木の文化」に、学習者の興味と関心が広がるように留意する。
- 留意点** ●事後指導では
世界遺産の登録基準に興味・関心が広がることを予想される。登録基準の学習は、世界遺産の種類や学習にもつながり、世界遺産全般についての学習の深

まりが期待できる。

3.4. 「木の文化」の学習の流れ

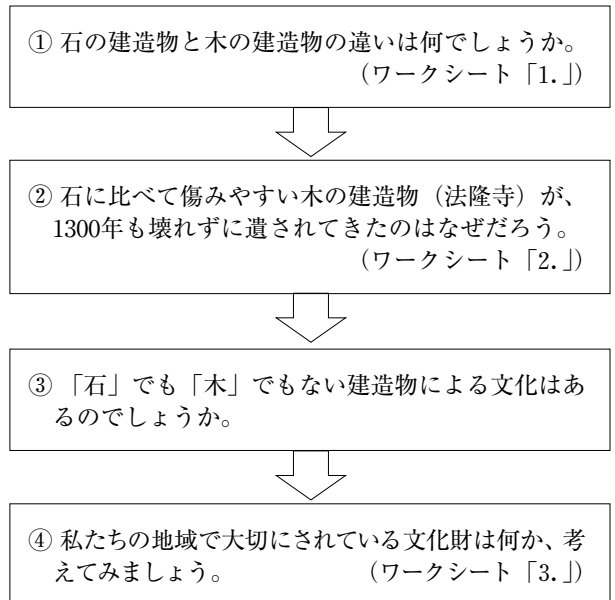
学習活動	教師のはたらきかけ
導入 写真① ⁽⁴⁾ のユネスコのマークからパルテノン神殿を連想する  写真①	<ul style="list-style-type: none"> ●ユネスコのマーク（写真①）のデザインが何を元にしたものか、自由に連想させる。回答を板書するのもよい。 ●建物を連想する回答が出たら、具体的な建物の名前や地域をあげさせる。
展開 写真②から「石の建造物」の材料について考える  写真②	<ul style="list-style-type: none"> ●パルテノン神殿（写真②）の材料は何か、学習者に問いかける。 ●パルテノン神殿が含まれる世界遺産「アテネのアクロポリス」について簡単に説明し、石の建造物が、創建以来2400年以上も遺っていることを考えさせる。
写真③から「木の建造物」の材料について考える  写真③ 材料の違いから、それぞれの建造物の特徴について考える	<ul style="list-style-type: none"> ●法隆寺（写真③）の材料は何か、学習者に問いかける。 ●日本の伝統的建造物の多くが木造であることを確認させたうえで、法隆寺は、創建から1300年をへた「世界最古の木造建築」であることを説明する。 <p>①石の建造物と木の建造物の違いはなんですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●それぞれの特徴を具体的に挙げさせる（ワークシート⁽⁵⁾「1.」に記入）。 ●石の建造物は長持ちする（保存性がよい）ために世界遺産に多く選ばれていること、ヨーロッパの建造物の多くは「石の文

<p>木の建造物の保存を妨げる出来事や原因について話し合う</p> <p>木の建造物を守るために「木の文化」について考える。</p> <p>法隆寺の世界遺産登録は、「木の文化」が世界的に認められた事例だったと理解する</p> <p>写真④を見ることで、木の文化の維持、保全には補修が欠かせないことを理解する</p>	<p>化」によって支えられていることに気づかせる。</p> <p>②石に比べて傷みやすい木の建造物（法隆寺）が、1300年も壊れずに遺されてきたのはなぜだろう。</p> <p>●地震、火事、戦争などによって木の建造物が失われた事例を、学習者に考えさせる（ワークシート「2.」に記入）。</p> <p>●それまで「石の文化」中心だった世界遺産の判定に、「木の文化」の特性を認める考え方も加わったことを説明する。</p> <p>●写真④（法隆寺）から、木の建造物には、補修や解体修理が不可欠なことを説明する。</p>
	
<p>写真④</p> <p>石でも木でもない建造物による文化の存在を考える</p> <p>住民の修復によって維持されている世界遺産の存在を知る</p>	<p>③「石」でも「木」でもない建造物による文化はあるのでしょうか。</p> <p>●写真⑤の「ジェンネ旧市街」を紹介。アフリカの「泥の文化」に気づかせ、文化の多様性について理解を深める契機とする。</p>
	<p>●住民が壁の表面を定期的に塗り直す「ジェンネの大モスク」を例に、修復によって維持されている世界遺産があることを</p>
<p>写真⑤</p>	

<p>「木の文化」を伝えた人々と、その姿勢について知る</p>	<p>知らせる。</p> <p>●資料シートの西岡常一の言葉を導入に、学習者に、「木の文化」を守り伝えようとした人々がいることと、「木の文化」を伝える技術の奥深さを理解させる。</p> <p>●木を守ることは、自然を生かすことであり、文化財と自然はつながっていることに気づかせる。</p>
<p>まとめ</p> <p>地域の文化財の価値を評価し、維持には何が必要かを考える</p>	<p>④私たちの地域で大切にされている文化財は何か、考えてみましょう。</p> <p>●地域の文化財の価値を自分たちで評価し、未来に伝えていくために何が必要かを考えさせる（ワークシート「3.」に記入）。</p>

3.4.1. このワークの学習プロセス

「木の文化」の学習プロセス



この学習プロセスの中で、学習者は、①で石の建造物に比べて、木の建造物が傷みやすいことを認識する。②では、傷みやすい木の建築物には保存と修復の努力があったことに理解を深め、法隆寺が世界遺産に登録されたことで、木の建造物が保存と修復の中で維持されてきた「木の文化」について理解が進み、登録基準の認識が広がっ

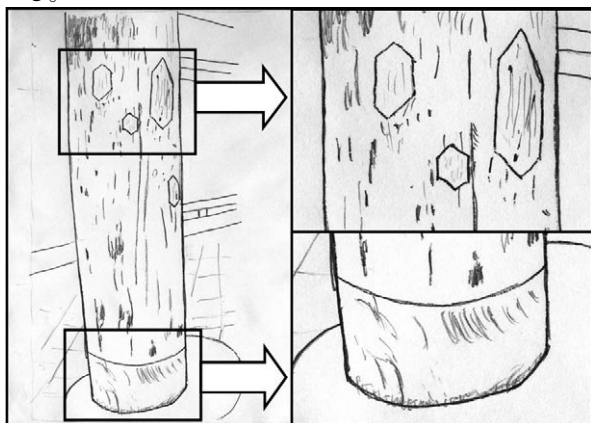
ワークシート（「豊かな世界遺産編」CD-ROMに収納）



たことを学習する⁽⁶⁾。③では、マリ共和国の世界遺産「ジェンネ旧市街」を知ることで、アフリカの「泥の文化（土の文化）」の存在に気づき、文化の多様性について理解を深めることになる。④では、この学びを身近な文化財とつなげることで、地域の遺産を評価し、未来に伝えていくためには何が必要かを考えることになる。

3.4.2. 写真が語るもの

このワークでは、写真④と資料シートの提示が生徒の心を揺さぶる。特に写真④の補修された柱は学習者の注目を集めることになる。よりわかりやすい写真を求めた結果、筆者の授業では自身が撮影した写真⑥を使用している。



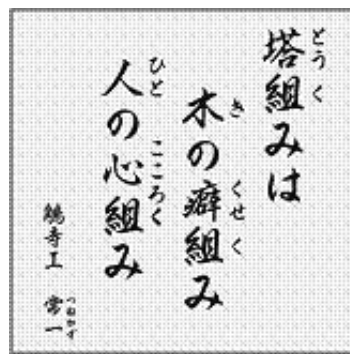
写真⑥

写真⑥の□で囲んだ部分が修復の跡である。下部が「根継ぎ」といって、傷んだ柱の下部を新しい部材と入れ替えた状態である。上部は柱の傷んだ部分に多角形の木をはめ込み、補修をしている様子がわかる。この柱は、法隆寺中門にあり、西院伽藍の参拝者であれば誰でも見ることができる。中門は世界最古とされる法隆寺の建造物の一部であるので、この柱一本で、木造建築物が1300年もの間、補修を経ながら現代に伝えられたことが説明できる素晴らしい教材となる。実際、筆者の授業や講演でこの写真を示すと、学習者や聴講者は必ず法隆寺の柱に強い関心を示す。このことが、教材として写真がもつ影響力を物語っている。

3.4.3. 資料が語るもの

資料シートでは、西岡常一の言葉が印象深い。資料①は、西岡の言葉をもとに作成した資料シートの一部である。「塔を建てるときは（技術だけでなく）、木の癖を見抜き、工事をする人の心をひとつにすること（が大切である）」という意味である。

資料①



資料シートの本文には、西岡が法隆寺を構成する飛鳥時代の木材は1つひとつ寸法がちがうことを指摘したことが述べられている。それは木の性質によって使い方をかえたためだという。例えば、寸法違いでも、右曲がりの木は右に大きな力がかかる箇所に使ったり、将来の木の収縮を計算して、長さを調節したりした形跡が見られるというのである。

また、西岡は「木の文化は、自然を守る文化からしか生まれない。」とも述べている。それは、今の日本では樹齢1000年を超える檜を手に入れることが困難になっているからである。奈良市の薬師寺は、輸出禁止になる前に台湾から大量に買い付けた檜を使って、伽藍の再建を進めているという。これに対して、中金堂の再建に着手した奈良市の興福寺では、檜が手に入らず、アフリカのカメルーンから木材（檫）を調達していることはあまり知られていない。これらは、自然保護や自国の資源保護の観点から、現在は木材の入手が世界的に困難になっている事実を示すものである。この事実からは、持続可能な社会のあり方を考えさせられる。

資料シート（「豊かな世界遺産編」CD-ROMに収納）



2009年の教材（世界遺産学⁽⁷⁾の最初の授業で使用）



持続可能な社会の構築を考えるには、身近な自然を大切にすることに目を向けるべきだという西岡の言葉には、ESDに通じる重みがある。

4. 世界遺産教育の意義

この章では、「木の文化」の実践を検証することで、世界遺産教育の意義について3点から論じる。1つは、学習者の変容と行動について、2つは、教材の普遍性について、3つは、ESDの学びとの関連性についてである。

4.1. 学習者の変容と行動

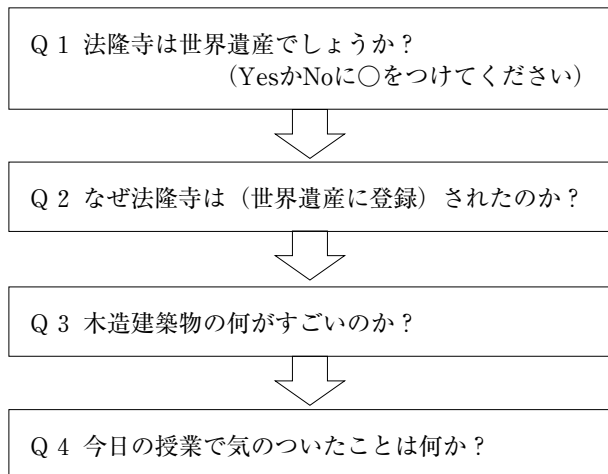
4.1.1. 世界遺産「法隆寺」の再認識

筆者は、「木の文化」の教材を制作する前の2009年に、次のような教材を用意し、発問の連続性から学習者の変容を調べる授業を行った。

この教材でのQ（質問）2～4が空欄になっているのは、質問を先に示すと、前の質問の答えが推測しやすくなるためである。そのため、学習者は1つの質問に回答してから、次の質問を教材に書き込みながら学習を進めた。質問の詳細は次の発問の流れ（世界遺産法隆寺を再認識する学習プロセス）に示す。

この授業で筆者が明らかにしたかったのは、法隆寺が世界遺産であることの素晴らしさを理解することで、学

世界遺産法隆寺を再認識する学習プロセス



習者が法隆寺の価値について再認識することである。以下に、各問いの学習者の回答を示す。

- Q 1 法隆寺は世界遺産でしょうか？
A・教材（プリントNo.0）提出者全員（35名）がYesに○をつける。
- Q 2 なぜ法隆寺は世界遺産に登録されたのか？
A・現存する世界最古の木造建築群だから。33名
・聖徳太子とゆかりの寺だから。2名
・中国の影響がみられるから。1名

- ・世界最古の仏教美術がみられるから。1名
- ・世界的に珍しい遺物が残っているから。1名

Q3 木造建築物の何がすごいのか？

- A・残りにくい木を使用しているのに、1300年もの間、そこに現存しているから。32名
- ・その木がいつ頃取れたのか時代が分かるから。1名
 - ・補修のしやすさ。1名
 - ・当時の技術がすごい。1名

Q4 今日の授業で気のついたことは何か？

(学習者の回答の一部を引用)

- 生徒A：法隆寺の中門の柱について、今日新しく知識として知れたので良かった。法隆寺の建物の時代を一つ一つ確認して詳しいことを知りたいと思った。
- 生徒B：世界史という授業自体がないので、世界に目を向けることができ、全てに興味湧き、法隆寺のことについても知る事で良い刺激になったと思います。
- 生徒C：日本以外でも、文化財保護法のようなものがあったのか疑問に思った。世界遺産の登録基準が解ったような気がする。
- 生徒D：中国の方では石も多いと思うのに、どうしてアジアは木の文化が発達したんだろうと思った。法隆寺はよくこの時代まで残ったなと思った。
- 生徒E：私は今まで世界遺産は歴史的や文化的に凄く価値のあるものだと思っていましたが、その根本にあるものは、人の大切なものを守りたいという気持ちなのだと思います。法隆寺にしても、各時代の建築様式が残っているということに感動を覚えた人の思いも見事なものだと思いました。
- 生徒F：日本と世界の考えの違いがある。その考えの違いに、各国の文化が関係している。「石の文化」「木の文化」「土の文化」、様々な文化の中で、日本独自の「木の文化」の例（法隆寺）を勉強して、これから、もっと理解し、守っていく事が重要だと感じた。

質問1から、学習者全員は法隆寺が世界遺産であることは認識していることが分かる。さらに質問2からは、世界最古の木造建築物としての法隆寺の評価も、ほぼ全ての学習者が理解している。質問2以降は、自由回答(複数回答も可)なので、多くの学習者が「世界最古の木造建築物」と回答したことに驚かされる。質問2を受けて、質問3では木造建築物のすごさについて質問した。すると、1300年以上も現存していることに回答が集中した。この学習プロセスから、学習者は法隆寺が単なる世界遺産ではなく、維持することが難しい世界最古の木造建築物であることに認識を深めていることが明らかになる。

授業は質問3以降、「木の文化」の学習プロセス①～③と同様の学習を行った。木の建築物と石の建築物を比較させることで、木の文化が世界遺産にもたらした影響を考えさせ、さらに土の建築物を示すことで、文化の多様性に気づく学習である。

質問4は、この授業の終わりに学習者の気づきを感想として整理させたものである。生徒Aは法隆寺について関心を示し、さらに学習しようとする意欲を示している。生徒Bは自身の興味が湧いたことにふれながら、世界に目を向けることができたこと、視点の変化について述べている。両者は、授業を通して興味・関心が深まり、授業に取り組む姿勢が変化したことが分かる。

生徒Cは法隆寺が法律で守られていることから、他国の文化財の保護について観点を広げている。生徒Dは、中国で石の建築物が多いことに疑問を感じ、アジア全体の木の文化について考えを深めている。アジア諸国の間での文化の多様性について観点を広げていることが注目される。この両者は疑問をもつことから、他国の文化について観点を広げていることが分かる。これは、多様性の理解が深まったことを示していると言えよう。

生徒Eは表面的な価値ではなく、法隆寺を伝えた人の気持ちに迫ることで、「大切なものを守りたい」という、普遍的な気持ちに気づいている。この気持ちがESDの始まりである。これに対して、生徒Fは「もっと理解し、守っていく事が重要だ」として、守ることの大切さを訴えている。この考えはESDそのものであり、この学習者は、ESDにつながる気持ちの変化を起こしたことになる。

この2009年の実践から、世界遺産法隆寺を「木の文化」の観점에서学習することが、学習者の気持ちや態度に変容をもたらすことを検証し、学びがESDにつながる効果があることが実証できた。そして、この実践の成果が、「木の文化」の教材の開発に発展したのである。

4.1.2. 高等学校における「木の文化」の実践

開発した「木の文化」のワークを筆者の勤務校(高等学校)で実施した際の感想⁽⁸⁾の一部を以下に引用する。

【2010年(平成22年度)の生徒の感想】

- 生徒G：樹齢1000年以上の檜が今はもう手に入らないと知って、すごく恐怖感を覚えた。また、自分たちのグループが調べている内容と関連する部分が多かったので参考になった。
- 生徒H：木の文化が今あるのは、色々な人の努力があったからだと改めて思った。森林を切り開いてばかりいる今の日本人は本当にダメだと思う。木は何千年もかけないと立派な木にならないので、今から大切にすべきだし実行するべきだと思う。西岡さんの言葉がすごく胸に響いた。
- 生徒I：元々、ユネスコの中心だった欧米は石造物が多かったのも、木造建造物が残らないだろうとい

う欧米人の考えは分からなくもないが、他文化の理解をもっと早くからしていれば、もしかしたら消失せずに済んだ文化財もあったかもしれないと思った。

生徒J：木造の文化財を長く、そしてなるべくオリジナルの状態を保つ。それはただ保存していただくのではなく、人を育て、材料を育てることであると感じました。また、世界には木でも石でもない建造物があり、それが文化財になっているというのは、初めて知りました。

【2011年（平成23年度）の生徒の感想】

生徒K：課題研究の際に色々調べてみたけど、やっぱり人間って嫌な生物だなあって思った。今までの歴史の中ですごい技術とか素晴らしい建物とかいっぱい作りだしてきたけど、それが原因で結局は自然を壊してしまったり、戦争とかでせつかくつくったものも破壊していく人間ってどうなんかなあって思った。何でも良いことばかりじゃない。悪いことも全部含めて知ってからこそ、本当の文化財を守っていくという意味になるんじゃないかなあと思った。

生徒L：日本の木造文化財が、外国で誤解されていたなんて知らなかった。昔の人が、大切に大切に補修して、守ってくれたからこそ、今、見ることができるし、世界の人に価値あるものとして認めてもらえた。あたりまえにあるものとして見てきたけれど、たくさんの人の意志や心がつまっているので、それをちゃんと後世の人に伝えていかなければならないと思った。

生徒M：私が今、この目で木造建築物を見ることができるのは、復元や保存、補修作業に携わった人がいたからこそ。木造は弱点が多いというのに、何百年、何千年の間残っているものがある。人の存在なしでは、今日まで残っていない可能性があるのだと思った。技術は伝承できても、実践できない。伝承されたものをどうやって生かしていくかが課題である。私たちにできることは何か。それを探さなければいけないのだと思った。続いていくことも終わらせることも、私たち人間次第だと。

生徒N：身近にある法隆寺が世界遺産であることが当たり前と言うより、何も不思議な感じがしなかったけど、今回の授業を受けて「木の文化」について学び、木が現代まで残っているおかげである人の力の大切さが分かった。ただ最後の映像を見て、「技術を伝えることはできるけど木がない。」という言葉聞いて、これから自分たちが自然保護などをしていくべきだと思う。

この「木の文化」の実践は、2010年から2年間継続している。このため、年度を超えて学習者の感想を収集することができた。以下、各年度の学習者の感想を比較しながら、分析を進める。

まず、生徒Gと生徒Kを比較したい。Gは檜がすでに入手困難なことに危機感をもっている。この危機感は、Kの人間に対する危機感と共通する。このことから、実践から学習者が危機感をもつ学びがあることが、年度を通して明らかとなる。しかし、Kはその人間の悪い面も理解していくことが文化財を守るうえで大切なことを指摘していることに、思考の深まりを見て取れる。

生徒Hは、色々な人々の努力があったことが木の文化を伝えたことを述べている。これはLが補修をして守ってきた人がいたことに気付いたことと共通する。そして、両者とも、その気持ちを伝えることの必要性を、教材の学びから感じている。

生徒Iは、これまでになくなってしまった文化財に思いを馳せる。同じく生徒Mも「終わらせることも人間」と指摘する。今日まで伝わったものが明日まで残っていると限らない。その持続を妨げるものが多文化への理解不足だとするIと、自らの問題だとするMの対比も興味深い。しかし、アプローチの違いこそあれ、これらはESDにつながる考え方となる。

生徒Jは、保存とは、人を育て、材料を育てることと述べ、持続可能性について言及している。生徒Nは、これから自分たちが自然保護に関わることを述べている。両者は、一般論と一人の人間としての取り組みと、立場は異なるが、持続可能性について具体的な方策を指摘している点が共通する。これらの具体的な方策を示せるようにすることがESDである。

両年度の生徒の感想から言えることは、書き方や視点は異なるが、それぞれが「木の文化」の学習により、世界遺産と自分たちの生活のつながりを認識し、石や木や土の文化の多様性を理解することで、考え方に変化がもたらされたことである。その学びのプロセスにおいては、年度を超えた差が見られない。特に、生徒Nは、法隆寺が世界遺産で当たり前だったという理解から、最後には自分たちがとるべき行動について言及するまでに意識が変容している。

このように、「木の文化」のワークの実践は、生徒に多様な変化を生み出すものである。世界遺産の価値を深く認識するとともに、地球の諸課題に気づき、未来に眼を向けるESDの観点へと変容させるものと言える。このような学びがもたらされたのであれば、この教材の学習のねらいが十分に達成されていると言える。

また、学習者の行動については、生徒GとKが述べているグループでの調査活動がある。これは、第2・第3学年で実施される学校設定科目の「課題研究」における

班別の調査研究活動を指す。Gのグループでは「文化財の保存と伝承」をテーマに研究を進めており、その後、遷都1300年祭で注目された平城宮跡の史跡としての保存と、公園としての活用に関して発表するに至った。その成果は、校内の学習活動の報告会（国際歴史文化フォーラム）でも発表され、その様子が新聞でも報じられた⁽⁹⁾。また、Kのグループも建築物や仏像が現在に残されたことを題材に課題研究の発表を行い、文化財を未来に伝えることの大切さを報告している。

これらの研究活動は、生徒が文化財の保存と伝承を目指して実際の行動を起こした例として評価できる。教育活動の成果を評価するにあたって、学習による生徒の変化を検証することと、内発的な行動を促すことは難しい。しかし、これらの事例は「木の文化」による世界遺産教育の取り組みが一つの刺激となることで意識の変容をもたらし、研究活動が具体的な行動と重なった点は間違いない。生徒がESDの視点に関わる文化財の保存と継承について調査・研究を進め、発表（行動）に至ったことは世界遺産教育の成果として、大いに評価できる。

4.2. 教材の普遍性

4.2.1. 大学における「木の文化」の実践

この「木の文化」は、大学でも実践する機会⁽¹⁰⁾に恵まれた。その際の学生の感想の一部を以下に記す。

学生O：今回の講義を受けたことで、世界遺産をどのように教材に生かすのかということが少しはわかったような気がします。ただ単にその世界遺産を細かく分析するといった事だけでなく、他とのつながりを意識して教材を作ることが重要であると思いました。そのつながりを見い出していくためには、やはり自分がその世界遺産に興味をもち、その中に疑問を感じたことなどを切り口にして他のものにつなげていく事もいい方法なのではないかと思いました。

学生P：ギリシアで見られる石の文化、東亜で見られる木の文化、そしてインドの方で見られる土の文化。それぞれの地域で最も身近なものがきっとその長所が最も生かせる形で発展していることにとても興味が湧きました。私は今まで日本の文化のみ関心を持って見ていましたが、他の文化との違いも、もっと知りたいと思いました。

学生Q：今日は法隆寺を中心に学んでみたが、法隆寺一つをとっても、いろいろな切り口から、いろいろなどところにつながるということが分かった。法隆寺の知らないところもたくさんあり、さらに深めていけると、深めていきたいこともあって面白いなと思った。改めて法隆寺のすごさも分かった。今までは、漠然と世界遺産=すごい。

で終わっていたけど、何がどうすごいのか分かった。歴史だったり、建築だったり、様々な観点から教材化できるなと思った。

学生R：僕は奈良県民ですが、法隆寺に行ったことも見たことも全くなくて、興味は全くといっていいほどなかった。でも、今日、祐岡先生に講義をしてもらって、法隆寺の建築様式について学べて本当に行ってみたくになった。なぜ1300年も法隆寺を支える木は耐えているのか分かったし、学べることが非常に多かった。昔の人の発想や考えに、すごいものがあるなと感じた。授業を受けれて得たものを友達に伝えたい。

学生Oは、教材化に注目することで、世界遺産を分析した切り口をつなげていくことを述べている。これこそが、筆者が指摘する学習プロセスである。世界遺産と学習者をどのようにつなげるかは、教材化の際には不可欠な観点である。また、つながりをもたせることで、学習者の理解を促すことができるのである。

これに対して学生Pは、文化の多様性について述べている。多様性の理解は個々の文化のつながりを理解できて深まる観点である。また、Pは文化の長所について述べていることも注目される。

学生Qもまた教材化の観点から法隆寺のすごさについて再認識している。改めて法隆寺の価値を理解することが大学生でも認められたことで、この教材が初等・中等教育に限らず、高等教育でも有効である普遍性をもつことが指摘できる。

学生Rは奈良県民でありながら、これまでまったく認識していなかった法隆寺について、急速に理解を深めた。そして、その理解した感動を友人に伝えようとしている。伝えることが持続性の始まりだとすれば、RはESDの姿勢を示したことになると言える。

大学生の感想からは、教員を志望する学生として、世界遺産に着目したESDの教材化への意欲がうかがえる。それは、この授業が世界遺産の教材化をテーマにして講義やディスカッションを進めた結果だと考えられる。授業で学んだことを伝えたいと感じたRの感想や、OやQの教材化への切り口や観点からは、教師として生徒へ伝えたいことができたことの感動が伝わってくる。このような教師から学習者への学びの伝達も持続性の一つであり、ESDに含まれると筆者は考える。

また、改めて法隆寺の価値を認識したQやRをはじめとして、多くの学生がこのワークで法隆寺の認識を深めることになった。これは、大学生にも変化をもたらしたと考えられる。したがって、「木の文化」の教材は大学生にも有効であることが実証され、より普遍性のある教材であることが明らかになった。

4.2.2. 中学校における「木の文化」の実践

この「木の文化」のワークの学習プロセスの④で、身近で大切にしたい文化財について話し合う活動を行っている。世界遺産がない地域でもこの実践が可能のように配慮したためである。それは、田渕（2011）が指摘する「地域・世界遺産教育」の概念を援用したものである。しかし、筆者はこの学習モデルを各地で紹介する中で、地域を選ばない普遍性を感じるようになった。

例えば、この学習モデルは植林活動を行っている松江市立八雲中学校でも実践された⁽¹¹⁾。その生徒の感想の1つに次のようなものがある。

生徒S：僕たちの文化に木がとても深く関わっていることがわかった。法隆寺を見たことがないので生で見たいと思いました。

この生徒Sの感想から、法隆寺の価値が「木の文化」を通して再認識されたことが読みとれる。見てみたいと興味を覚えたこの生徒は、法隆寺が世界遺産に認定された「世界最古の木造建築物」の価値を、認識したのである。それは、法隆寺が世界遺産に登録された際の「顕著な普遍的価値」の1つを認識したことになる。この価値は、文字通り普遍的に理解できるものであり、世界遺産が身近にあることとは関連性がない。そのため、世界中の誰もが世界遺産に魅せられることになる。

この中学校での実践から言えることは、世界遺産教育が世界遺産のない地域でも成立することである。個々の世界遺産が持つ、「顕著な普遍的価値」に着目して教材化し、幅広い教育実践を行うことで、世界遺産教育はどこでも可能となることを、ここでは強調しておきたい。

4.3. ESDの学び

これまでの「木の文化」のワークの検証の中で見られたように、世界遺産教育はESDと密接に関連する。「木の文化」は現代に伝えられたものであり、我々の世代が未来へ伝えていかなければならないものである。しかし、技術の伝承はできても、材料の伝承はできない。自然との共生を意識できなければ、文化も未来へ伝えることができないのである。

また、先に述べたように「木の文化」のワークには普遍性があり、世界遺産がない地域でも実践可能である。条件を整えば、「木の文化」は世界中で活用できる学習モデルとなるかもしれない。“Think globally, Act locally”とは、ESDにおいても重要な視点であるが、これを世界遺産教育に置き換えると、田渕の言う「地域・世界遺産教育」は、地域の遺産を大切にする“Act locally”な教育と言える。これに対して、今回筆者が指摘した世界遺産の普遍性に着目した教材化は、世界規模で「木の文化」を考えることになり、“Think globally,”な世界遺産教育と言える。つまり、教材化の観点により、世界遺産教

育は“Think globally,”かつ“Act locally”な教育となりえる。よって、世界遺産教育は、両方のアプローチからESDに迫る教育と言えるのである。

5. おわりに

本稿では「木の文化」のワークと、それを掲載している「豊かな世界遺産編」の紹介を行うとともに、「木の文化」の実践の検証から、世界遺産教育の意義について「学習者の変容と行動」「教材の普遍性」「ESDの学び」の3点から論じた。その結果をまとめると、次の3点となる。

1つには、学習者の感想の分析を元に、学習者の変容と行動について明らかにできたことである。高等学校での複数年度の実践を中心に、大学や中学校までの幅広い学習者の感想を分析し、「木の文化」のワークの学習効果が立証できた。

2つには、世界遺産教育の普遍性について教材化の視点から論じることができたことである。教材化の視点を明確にもつことは、本来あたりまえのことである。しかし、それがおざなりになっていることが今日の学校教育の問題であることを、実践者として反省したい。教科書に頼り切った、知識理解重視に偏った実践では、教材の深まりが期待できないのである。また、研究者としては、それぞれの教材化の視点を明確に示す理論の構築が必要であろう。世界遺産教育については、個々の世界遺産がもつ「顕著な普遍的価値」を研究し、普遍性の観点から教材化を試みるのが、広く理解の深まる教材づくりにつながる。そして、この普遍性に着目した教材化のプロセスが、世界遺産教育の理論化の一助となるはずである。これは、筆者自身の課題とし、今後も多くの実践事例の共有と蓄積を行い、その分析を行う研究を継続していく必要がある。

3つには、世界遺産教育が個別の遺産を対象とするローカル（地域規模）な要素と、普遍的理解を促すグローバル（地球規模）な要素の両面から展開できることを指摘した。これにより、世界遺産教育がESDとの関連性において意義のあるものであることが、さらに実証できたと考える。今後は、この観点を世界遺産教育の体系化を進める一つの視点として、研究を進めていきたい。

最後に、この研究から、世界遺産教育の広がりについて考察すると、世界遺産教育は小学校から大学までの全てのレベルでの実践が可能であることが指摘できる。「豊かな世界遺産編」は対象を小・中学校を中心としているが、世界遺産の普遍性に着目して教材化を深めると、高等学校や大学でも十分通用する学習モデルとなりえる。少なくとも、筆者の「木の文化」は中学校から大学まで実践を行い、相応の教育効果が得られたことが、それを

実証している。

また、世界遺産教育は校種間の広がりだけでなく、世界遺産のない地域でも実践可能なことを指摘できたことも大きな意味を持つ。教材が普遍性を保つと、世界遺産教育が世界遺産のない地域でも実践可能であり、よりグローバルな視点から世界遺産について学ぶことができることは、これまで指摘されてこなかった。世界遺産の地域性に注目するあまり、本来あたりまえである世界遺産の普遍性が見落とされ、議論の俎上にもあがってこなかったのである。これでは、町おこしや地域おこしのために世界遺産の登録を目指す運動と変わりが無い。世界遺産教育は地域自慢教育に成り下がってはいけない。教育に携わる者としては、世界遺産が人類共通の豊かなたからものであることを、再認識する必要がある。

我々が制作した「豊かな世界遺産編」の随所に散りばめられた世界遺産の普遍性に着目し、多くの国や地域で世界遺産教育が展開されることを期待する。

付記

英文の要旨については、奈良女子大学附属中等教育学校の南美佐江教諭に指導をいただいた。付して感謝にかえたい。

注

- (1) ユネスコスクール公式ウェブサイト (2012年5月6日アクセス) (http://www.unesco-school.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=125)
- (2) 守ろう地球のたからものウェブサイト (2012年5月6日アクセス) (http://www.unesco-esd.jp/study/vol_02/index.html)
- (3) この「豊かな自然編」とは、見上一幸監修の「『守ろう地球のたからもの』-持続可能な社会をめざして-豊かな自然編-」2008年、社団法人日本ユネスコ協会連盟発行

のものである。

- (4) この教材では写真が大きな役割を果たすが、掲載の都合上、本稿では写真の一部を筆者のイラストで代用する。実物の素晴らしい写真は、(2)の教材キット「豊かな世界遺産編」を参照されたい。
- (5) ワークシートの質問項目は、3. 4. 1. を確認されたい。
- (6) 筆者は、「木の文化」の教材作成過程で1994年の「奈良ドキュメント」を発見し、2009年11月2日の教材作成会議で紹介した。本文は以下の文化庁のウェブサイトから確認できる。(2012年5月6日アクセス) (http://www.bunka.go.jp/1kokusai/pdf/nara_Nara_j.pdf)
- (7) 筆者の勤務校の歴史文化科では、学校特設科目として「世界遺産学」の授業があり、第3学年に2単位で開講し、毎年40名が受講している。
- (8) これらの感想は、2010年10月と2011年6月の2回、(7)の世界遺産学の授業で、法隆寺国際高等学校 歴史文化科第3学年(当時)の80名(1学年40名)から回収した。
- (9) 毎日新聞2011年2月5日21面「なら 元気印@学校」
- (10) 奈良教育大学の平成23年度前期授業科目「持続発展教育と世界遺産」中澤静男専任講師担当で、2011年6月17日に筆者が特別講義を実施した。
- (11) 八雲中学校の山口純一先生とは、2011年9月、「豊かな世界遺産編」の教員研修会で知り合った。今後も、このような出会いから実践が広がることを期待する。

引用・参考文献

- 田淵五十生 (2011). 『世界遺産教育は可能か-ESD(持続可能な開発のための教育)をめざして-』奈良教育大学ブックレット5, (pp.34-35), 東山書房.
- 中澤静男 (2009). 「世界遺産教育の構築-奈良市教育委員会における取り組み-」『国際理解教育15』 pp.104-121.
- 山下欣浩・田淵五十生 (2010). 「日本ユネスコ協会連盟の教材キット『守ろう地球のたからもの』-その作成意図と具体的事例-」『奈良教育大学教育総合実践センター研究紀要19』 pp.135-144.